※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあったのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1356
0748-69-2155

本号の紙面
★ネウボラ会議始動
★主査級視察研修報告
★甲賀版　つながり図鑑づくり
★重層物語　ファイナルシーズン

「ネウボラ会議」始動

医療ケア児をチームで支援

医療ケアとは、病院以外の自宅などで日常的に行われる医療行為（吸痰吸引・経管栄養・導尿・在宅酸素療法・人工呼吸器使用など）

甲賀版ネウボラは、母子の相談だけに留まらず、その家族や地域まで視点を広げ健康と福祉をモニタリングすることで、必要な医療・保健・福祉等の情報提供や支援をし、疾病の予防や健康づくりにつながることをねらいとしています。

切れ目のない支援/支援者を孤立させない

重層的支援体制整備事業の柱の一つである、重層的支援会議（多機関が複合的な事例を検討する場）は、これまでは、ひきこもり、介護、障がい等の事例に対する検討をしてきましたが、今回から医療ケアが必要な児や心身に重い障がいのある児についても、検討することとなりました。

保健センターから提出した医療ケア事例に、7機関、7職種の専門職が参加し、必要な医療を受けながら、地域で健やかに暮らすことができる体制づくりのために、「病院や看護師との連携ができる」「栄養や離乳食の助言ができる」「両親に対するピアカウンセリングの場所づくりが必要」「リハビリ職が保育園訪問できないか」等、それぞれの立場でできることを出し合いました。

さらに、地区担当保健師が孤立しないよう、ここにいるネウボラチームとして支えていくことを確認し、最後には、全員が拍手！

それぞれの専門職が持ち味を出しながら、役割分担にこだわることなく、対象者と支援者に寄り添う重層的支援会議、最強チームが生まれたような雰囲気でした。

報告会参加　主査級先進地視察研修

令和5年度に実施された、主査級職員による先進地視察研修報告会に参加しました。

人事課によると、10テーマに対し35チームが視察研修に参加し、報告を終えたとのことです。その中で当課に関連のあるテーマで、全国的にも有名な福井県坂井市を視察先としたチームの報告会に参加してきました。

坂井市では「さかまる会議」と呼ばれる取り組みが行われており、甲賀市における多機関協働の重層的支援会議がそれにあたります。会議設置当初は「困難ケースの支援調整」の色合いが強いものでしたが、会議を重ねることで現場の連携が進み、現在ではその役割は薄れているとのことです。

代わりに人事異動のリスクヘッジとして、「支援を包括化する人材を育成する場」としての役割をさかまる会議が担っています。

坂井市のすごいところは、会議の場を設定しなくても分野を超えた連携が定着しており、その連携を属人化させないところまで見据えていることです。どんな相談でも受け止められるよう間口を広くし、それぞれの機関が「のりしろ」を出し合う風土ができていました。

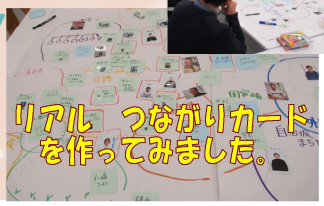
テーマ：重層的支援体制整備事業

視察先：福井県坂井市

地域共生の主管課ではないメンバーが本テーマを選び、甲賀市の福祉課題、生活問題として捉え学んでくれたのは、大変うれしいことです。市民の困りごとを自分のこととして捉えようとする職員の意識や行動の変化の現れで、庁内連携の成果でもあるでしょう。

本チームに限らず、彼らの気づきが甲賀市における実践（アクション）や提案になりうるには、活かせる風土の大切さを感じたところでした。

コミュニティコーピングから甲賀版つながり図鑑へ



今年度から、「みんなでe-こうか」さんと協働事業取り組みを始めたコミュニティコーピング。

ボードゲームで終わらずに、リアル甲賀版の「つながりカード」(人材発掘)を作るために協力いただき、市内12人の素敵な人と「みんなでe-こうか」メンバーのパートナーシップにより、見える化作業を実施しました。

文責：甲賀市役所　地域共生社会推進課　Ryuoh Maki

うまくいき過ぎた重層物語 FENWAL

今回は、『薄い月明かり』と題して重層物語をお届けします。地域共生社会を理解する助けになれば幸いです。

【主な登場人物】
○河本　希（かわもと　のぞむ）
３９歳男性。甲賀市職員。地域市民センターにて勤務。職場の者からは、窓口対応の名手だとささやかれている。人助けが趣味だという冗談には、まんざらではないところがあった。
○間島　望（まじま　のぞむ）
２９歳男性。精神的な不調もあり、無断欠勤や職場内でのトラブルが多く、仕事が続かない。家を追い出され、住み込みの職を求めて甲賀市に転入してきた。

ここから一歩も通さない
理屈も法律も通さない
誰の声も届かない
友だちも恋人も入れない
手がかりになるのは薄い月明かり

遅くなった仕事の帰り、河本は点滅信号に照らされた車内で、学生時代を思い返していた。自分に自信がもてず、周りを信じることもできず、ひどくみじめな気分で、頑なに心をとざしていた頃。
「月の爆撃機」は、偶然にラジオから流れてきたのではなかった。今日の昼過ぎにはじめて会った間島望という、同じ名前をした男のせいだった。

午後一時前、地域市民センターに一人の男がやってきて、つかつかと歩み寄り、窓口のカウンター席に無言のまま座った。河本はそれに気づいて自席をはなれ、軽く会釈をしながら向かい合わせで座った。
この時間には珍しい若者だ。三十前くらいか。大きめの黒いダウンからは染みついたタバコの臭いがする。何度も色を変えたのだろう、伸びた髪は痛んでいる。
真面目な印象はないが粗暴だともいえない。
「・・・・・・」
「こんにちは、今日はどうなされましたか？」
沈黙が続くのを避けて河本から切り出した。男は意外にも礼儀正しい声で、転入届を提出しに来たことを告げた。座ったまま手の届く引き出しから用紙を取り、こちらにご記入くださいと言って差し出した。男は記入方法のひとつも質問することなく、ゆっくりと強い筆跡で書き始めた。
ーまじま　のぞむー
同じ名前だ、河本は思った。
「おんなじ名前ですね」
間島は声に出して言った。えっ、ああ、私ものぞむといいます、不意をつかれた河本の声がうわずった。
「すいません。さっき名札が見えたんで」
間島は顔をあげないままで言った。
「全く構いませんよ。字は違いますが同じ読みですね。ああ、それに二人を合わせると希望になりますね」
相手からはなんの返事もなかった。
体を丸めて用紙に顔を近づけ、一画一画を丁寧に書く姿は、虫眼鏡で地図を見る年寄りみたいだった。河本は、小さくなった間島の後頭部を見ながら、用意もなく適当なことを言うもんじゃないと思った。

はじめて会ったこの男は、生真面目なのか、だらしがないのか、どこかいじらしくもあった。他人の人生を勝手気ままに推し測ることは良くないが、まるでこの世界に居場所がないように映った。書かれた住所は本当にあるのだろうか。
転入届を書き終えた間島はボールペンを横に置いて、ゆっくりと顔をあげて、こちらを見た。
「お兄さんはいいですね。希望を持っていそうだ」
「そんなことないですよ。最近は何をするにもすぐ疲れちゃって、年ですかね。間島さんは僕なんかよりも若いんだから、それこそ希望だらけじゃないですか」
間島は表情を変えずに、２９歳はもう若くないこと、仕事が続かず家に居づらくなったこと、頼れる身内も友だちもいないこと。そして、不安障害をかかえ医療受診を続けていることを、淡々と説明した。

窓口対応の名手といわれる河本の言葉は揺れうごき、上滑りし、相手に届く手前でぽとりと落ちる。苦しまぎれに、若い頃の苦労話をご大層にも披露し、まだまだこれからなんだから頑張れとエールまで送った。
「がんばれですか・・・。やっぱりお兄さんはいいなあ、幸せなひとだ」
また今度、自立支援医療の手続きに来ますと言って、間島は帰っていった。
外の駐車場からマフラーの爆音が響く、その音は少しずつ少しずつ遠のいて、泣き止んだかのように消えていった。あいつはどこへ向かって、どこで寝るのだろうかと思った。

ふと、息子の不機嫌な顔がうかぶ。美術の時間、細かな部分を丁寧にスケッチしていたら、全体のバランスがちぐはぐになってしまい、やけになって無茶苦茶に線を引いた。横を通った先生が抑揚のない調子で、「個性的ですね。その調子で頑張りなさい」と言ったらしい。
息子は、怒られる方がましだとぼやいた。

さっきの窓口対応はお粗末なものだった。思ってもいないくせに、「希望だらけ」とか、「頑張れ」と言ったところが、まずいけない。多少、個人情報に踏み込み過ぎた節もある。
しかし河本は、もっと深いところで落ち込んでいた。帰り際に、幸せなひとだと言われ、どうしようもない隔絶を感じたからだ。間島に悪いことをしたという申し訳なさの中には、いらだちがあった。

「俺にだって、苦しい時期はあったんだ・・・」
そう独りごちて、ボリュームをあげて車をはしらせた。
河本には、自らの善意が相手を傷つけたり、時に重荷となることに鈍いところがあった。人のためになると思い込んだ者の人助けは、たちが悪い。そういった善意は、相手のためではなく、ひとりよがりな自己満足へなり下がる。
暗く流れる景色のなかで、空を見上げても月明かりは見えない。全開にした窓から、頭を冷やせとばかりに風が吹き込むだけだった。

あの日以来、河本は自分が絶望していた頃を思い出すようになった。そうすると、今の自分は絶望していないという事実に突き当たる。でもどうやって、そこから抜け出せたのだろう。答えが見つからぬうちに小賢しい救世主願望が湧いて出る。あいつを助けてやりたい。間島が今の窮境を乗りこえる手がかりのような、その、何と表現しようか、暗いところをてらす光のようなもの。

画面の中では、日本代表がW杯のベスト8進出をめざし、監督や選手が口々に、「新しい景色」と言って、目を輝かせていた。
「こっちは手がかりすら見えないってのに」
河本は、仰向けになって寝ころがり、大きく伸びをして言った。熱狂的なサポーターのみならず、街頭インタビューの声までも、一緒に新しい景色が見たいです」なんて言っている。
くだらないとあくびしながらも、引っかかるものがあった。
ひとりでは、新しい景色は見えない・・・。

（作・中井　浩喜）

※重層物語の重層支援とは、だれひとり取り残さない地域共生社会をめざして、相談支援・参加支援・まちづくりを一体的に取り組むこと、一人の困りごとが、こぼれ落ちないように支援を重ねることです。それは支援者の価値観を重ねることでもあります。